

# 富士山麓病院新聞 第152号



高橋先生の指導により毎週行っているダンス教室のひとつ

## 《症例検討・99》

外出(徘徊)を止めようとする

暴力を振るう

院長 清水允熙

今回は、七十七歳の男性Nさんの例です。Nさんは特記すべき既往症はありません。現在の症状は以下の通りです。

### 〔主症状〕

A群 数年前から、もの忘れが目立ってきた。最近では、入浴しても体を洗えない。衣類は脱げても着ることができない。妻が死亡したことを理解できない。忘れている。

B群 些細なことで興奮し、息子の嫁を叩きそうになる。昼夜を問わず外出しようとする。外出すれば帰宅できない。前に入院した病院では、外出を止めようとする人に暴力を振るった。ナースにけがをさせたこともある。

## 【生活歴】

Nさんは几帳面で仕事一筋の性格でした。家ではすべてを妻に依存し、縦のものを横にもしない生活を送っていました。妻子には優しくなつたようです。

もの忘れが目立つようになつた三年前に、妻を癌で亡くしました。その後は、五人家族の息子の家に引き取られて、現在に至ります。

## 【経過】

家庭では何もしなかつたNさんは、妻の死後、不便な生活を続けていました。息子の嫁では、妻のような配慮を望むべくもなかつたのです。このような生活のなかの不便さや淋しさ、そして戸惑いや困惑などが認知症を時期を早めて出現させたと考えられます。

やがてNさんは願望（妻が生きていてほしかった）が現実と混同し、「妻が生きている。死んではいない」と思うようになりました。そう考えなければ、Kさんの気持は救われなかつたのでしよう。

ところで、妻が入院していた

とき、Nさんは付き添いのために病院へ毎日行っていました。

そこでNさんは「病院で妻が待っている。付き添いに行つてやらなければ」と考えるようになりました。

思いつくと、部屋の中で立ち上がりまゝ。しかし、玄関で、家族に「何処へ行くのですか」と聞かれるときには、自分が何のために外出しようとしたのかを忘れていきます。そこで「別に……」と口ごもります。

家族は「それなら、お父さん、外は車が走つていて危ないからお部屋にいてテレビでも見ていてください」と言います。したがつて、Nさんは部屋に戻ります。日に幾度となくこれを繰り返します。

Nさんは満たされない気分

頭の中がいつばいになります。わけがわからず不機嫌になります。その結果、自分の行方をさえぎる者には暴力的になります。

私たちの病院でのNさんへの対応は、Nさんが「外出しよう」と思いつく前に病院スタッフが「病院へ行きましよう。奥さん

の付き添いに行きましよう」と誘つて外出することでした。歩いていくうちにNさんは外出の目的を忘れまゝ。忘れてもいい

のです。Nさんのなかに満たされないものが少なくなればそれでいいのです。奥さんについて色々な話をしながら色々な所を歩き、記憶を少しでも蘇らせよう、もう一度少しでも何かを覚えてもらおうと、外出を繰り返しました。Nさんの気持も次第に落ち着いてきました。病院スタッフとNさんの信頼関係もしつかりしたものになつてきました。

入院後二カ月が過ぎた頃、スタッフ「付き添いに行きましよう」と言う。「妻は死んだよ」とNさんは教えてくれました。次いでNさんは妻がなくなつた頃の、周辺の出来事も思い出してくれました。

## 【考察1】

会話が成立している程度の認知症の状態では、目的がない出歩きはほとんどありません。本人がそのとき、思い出せなくな

つていて、行動（出歩き・徘徊）だけが残っている場合がほとんどです。したがつて、生活史から、本人が願つていたことを探り出し、その願いをかなえる、つまり、自己実現に協力することが適切な心理的対応となります。

Nさんの場合は理解者（妻）がいないための淋しさと、残された子どもたちからNさんの「存在価値」を無視されたことなどが、「特殊性」のある認知症の症状が出現する大きな原因であつたと考えられます。

なお、信頼できる人（病院スタッフ）を得てから、Nさんが「妻が死んだこと」を思い出したことは、私たちに考え方の変更を求める出来事でした。

## 【考察2】

## ●徘徊について

昆虫採集者が虫を求めて歩き回るのを「徘徊」とは言いません。つまり、徘徊とは目的をもたずに歩きまわることと定義されています。したがつて、高齢者の認知症による出歩きを、私

たちは「徘徊」と言っています。「目的をもっていないから」と理解されているからです。しかし、そのような出歩く行動をしている高齢者を落ち着かせ、よく話し合えば、「徘徊」と言われている行動には、行動目標や原因があることを聞き出すことができます。

しかし、やがてその行動目標は認知症の進行とともに、高齢者の記憶のなから消えていきます。そのとき、出歩くという行為が、この失われていく目標を再確認しようとして、探しまわっているということがわかります。あるいは、残された記憶と感情を消失と崩壊から防衛し、生命を存続させるための、高齢者の無意識の行為であることもわかります。

言い換えれば、「目標／夢」などの「未来」を失うと「思考する能力」が消え去ることを、私たちのからだは、つまり「出歩き」が知っていて、「出歩き」という行為が、高齢者を「認知症」の進行から守ろうとしていることがわかります。

認知症の進行に依じて四段階の「出歩き」の時期があります。

〔Ⅰ〕健康の維持、家族への配慮・責任・義務感、過去の習慣などが出歩きの原因や目的となる場合があります。いずれも認知症の進行を抑制するための正当な理由となります。

#### 出歩きの具体的理由例

- ・「健康を維持するために歩かなければ。」
- ・「病院へ行かなければ。薬をもらいに行かなければ。悪くなると困る。」
- ・「家を掃除に行く。家には誰も居ないから。」
- ・「買物、支払いなど済ませていることを忘れて、もう一度、目的の行為をしようとする。」
- ・「年金をもらいに行かなければ、妻に渡してやらなければ。」
- ・「自分も働かなければ。仕事を探しに行かなければ。」
- ・「思い出せないことが頻繁になつたための困惑・不安などのため落ち着いていられなくなり外出。」

・必要なもの（タバコなど）を

買いに行く。

・配偶者（妻）が亡くなったいることを忘れ、病院へ「付き添いに行かなければ」としての外出  
 ・「孫（または知人など）が病気だから見舞いに行かなければ」の外出など。

#### 〔Ⅱ〕現在の生活が若い頃から

願っていたり、期待していたような生活でないとき、つまり自己実現ができていない生活、尊敬と感謝を受けることのない生活、または存在価値を認めてもらえない生活……などから逃避するための外出があります。

注意・命令・叱責・嫌味・愚痴・叱咤激励などが多い家族との生活の場（家）にいたくないための外出・出歩きであることもあります。主に認知症中度で出現します。このような出歩きも、やがては行動の目標や自分の場所などを高齢者が忘れてしまつたため、「徘徊」と呼ばれてしまいます。

#### 出歩きの具体的理由例

・優しい人（祖父母・父母・兄弟・

姉妹など）がいて、自分が育てられた昔の家へ行くこととしての外出・出歩き。

・自分を信頼・尊敬・感謝してくれた子供たちのいた昔の家へ帰ろうとしての外出・出歩き。  
 ・昔からの願ひ・計画・期待などを実現させるための外出。

・「自分だってまだ働けるのだ。馬鹿にするな！」と考えることにより、「仕事がある」「まだ会社を退職していない」などと思いつい込み、仕事に出かけようとする外出。

・仕事離れや社会的地位離れなどができていない考え方をする場合、自分の昔の功績や働きを誇示するため、会社や仕事場へ行こうとする。「会社へ行く」「仕事に行く」と外出する（まだ退職・引退などしていないと思っている）。

・嫁の悪口を聞いてほしくての外出。

・働いていると思いつい込み、働いた分のお金を取りに行かなければ」の外出。

・「自分でなければわからないことがあるので、自分が交渉し



ないと……」の外出。  
・「殺される。助けて！」と逃げ回るような外出。

〔Ⅲ〕高齢者は出歩くこと・歩くことの目標のほとんどを失います。

「何もすることがないから歩いている」、いつも一緒にいる人が歩いているから「ついて歩いている」の徘徊となります。または歩くことは高齢者の、最後まで残る希望「家へ帰りた」「歩けなくなりたくない」を拠所としている場合もあります。

出歩きの具体的理由例

- ・誘われることから
- ・何もすることがないから
- ・毎日歩いているから

〔Ⅳ〕かつて生命が出現した頃の、『食うこと』と『動くこと』を必要とした生命体のあり方を再現したような出歩きがあります。つまり「落ちていっているもの（何でも）拾って食べるための出歩き」、「動いていることが生命力維持させている唯一の方法

であるかのような出歩き」などです。

出歩きの具体的理由例

・本能的な衝動

●徘徊についてのまとめ

徘徊と言われる外出、出歩きに対しては、高齢者が家族への配慮・義務を果たせるように、そして、もの忘れによる不安感をもたせないような対応をするべきです。

また、出歩きの理由を高齢者が忘れてしまっても、その理由を思い出させるような出歩きに誘導することです。そして、理由を思い出せたら、その理由の周辺の事情・出来事・関係する人たちを思い出させるようにする必要があります。

また、高齢者が昔から願っていたこと、期待していたことの実現に協力し、高齢者の『自己実現』の達成をかなえる対応が必要です。同様に高齢者の『存在価値』を高齢者と家族などが確認し合えるように対応する必要があります。

出歩きの理由と目的の場所を

忘れてしまった高齢者は、「歩き回ること」、「徘徊すること」によって、出歩きの理由と目的の場所を無意識に思い出そうとしていると考えてあげることが必要です。

〔まとめ〕

高齢者の出歩きは『自己実現』の行為、そして、認知症の進行を停止させようとする無意識の行為。



原稿募集

左記の通り新聞に自由原稿をお寄せください。入院患者さんとそのご家族の方々、職員とご家族の方々にお問い合わせ致します。

《内容》

- ・エッセイ、詩、短歌、俳句
- 《締切》

・平成二十九年十二月三十日

《提出先》

・相談室・川村研治宛

富士山麓病院

〒412-0006 静岡県御殿場市中畑1932



本院は30年以上にわたって培った臨床経験を活かし「早期発見」と「適切な診断・対応」を中心に認知症の専門的な治療を行っています。ご相談・お問い合わせなど、お気軽にお電話下さい。



TEL 0550-89-5671 FAX 0550-89-8017

## 心のふるさと

高橋 慎一郎

ただよう思ひは、私の気持ち  
を限りないノスタルジアに誘つ  
てくれる。そして思う、私の故  
郷はどこにあるのだろうか。

自分のイメージの中で作られた  
故郷は、緑豊かな日本の田園風  
景である。遠くに山脈がづらな  
り、田畑の側の清流、そこに水  
車小屋があり、水車がゆつくり  
と回り、純朴な村人たちが散見  
される詩情に満ちた絵葉書のよ  
うな光景である。

ところが、現実を振り返って  
みると、この様な故郷は、私に  
は存在しない。先の大戦の影響  
で、宮城県鳴子温泉に学童疎開  
その後、家族が疎開していた埼  
玉の山地等に行き、東京に帰つ  
たら、米軍の空襲で家は焼け瓦  
礫の山となった変わり果てた野  
原が私を迎えてくれた。つまり  
少年の頃から育った場所、通学  
する学校が目まぐるしく変転し  
て、君の故郷はどこと聞かれて  
も、固定して思い当たるところ

はないのである。従って幼馴染  
の友達も殆どいないので、人的  
な故郷もないといえる。

その後、早稲田大学に入学す  
ると、至る所に〇〇県人会とい  
った張り紙がしてあり、一〇〇  
県人よ、来たれ、故郷の先輩が  
諸君を待っている。県の奨学金  
支給の制度あり。〇〇県人会幹  
事」このように書かれていた。  
東京生まれの者には、都民会な  
ど無く、非常に寂しい思いをし  
たのであった。

だが、大隈講堂で政経学部  
の入学式が行われたさいに、都の  
西北で始まる校歌の三番目に  
『心のふるさと』という歌詞が  
出てきたのである。これが私の  
心をとらえた。

現実の画像で現れる故郷や、  
幼馴染のいた故郷はなくとも、  
私の心の中を探っていけば、『心  
のふるさと』があるのではない  
かと気づいた。その時、なぜか  
ドイツの文豪ゲーテのヴィルヘ  
ルム・マイスター修行時代にて  
てくる「ミニヨン」の詩が心に  
浮かんできたのであった。これ  
は主人公ヴィルヘルムが旅先で  
サーカスに売られて、親方から

折檻を受けている少女ミニヨン  
を親方から買い取って助ける話  
である。そのお札にと彼女は、  
夜、老ヴァイオリニストを同伴  
して、ヴィルヘルムの宿の部屋  
に来て、居間の床全体に沢山の  
卵をとどころに置き、蝋燭  
をアトランダムに何本も立てて、  
ヴァイオリンの伴奏つきで、そ  
れらを踏まないように軽妙に踊  
つてみせた。

そのミニヨンの詩が、私の脳  
裏をよぎっていったのである。  
☆ただ憧れを知る人のみ 私の  
心の苦しみをわかってくれます。  
あらゆる喜びから一人離れて  
私は遙か遠くの青い空を見つ  
めています…

☆君よ知るや南の国 レモンの  
花咲き オレンジ実る国  
空青くさわやかな風 桂樹はそ  
びえて 黄金色のミルテたわわ  
に実る…君と行こうよ

遙かにはるかな 君よ知るや  
南の国

誰の訳かも知らずうる覚えだ  
ったが、これらの詩の断片がふ  
るさとのない私の心になぜか鮮  
烈に浮かび上がってきた。

サーカスの歌姫であったミニ

ヨンは孤児であり、幼少の頃故  
郷を離れた。だが、かすかに残  
る記憶から、南イタリアが自分  
の故郷だと信じており、その情  
景を「心のふるさと」として憧  
れをもつて唄っていたのである。

この時、私は自分のふるさと  
は心の中にあると悟ったのであ  
る。そして私は「心のふるさと」  
を求めて、世界の文学、フラン  
ス、ドイツ、イギリス、ロシア  
等のいかほど時が流れても、い  
まなお燦然と輝く、世界文学の  
大山脈に足を踏み入れた。

そして険しい山道や、密林の  
奥深くに生い茂る木々をかき分  
け、足に絡む藨をのけながら、  
世界各地のさまざまに人々が地  
球上で繰り広げている、生々  
しい人間関係、人間心理の深  
奥、葛藤、冒険、見果てぬ夢  
さすらい、安楽、求める愛、希  
望、失意等作家・詩人たちが発  
見して示してくれたこの世の幻  
影の世界、あるいは現実の楽園  
等を知った。そして自分の真実  
の「心のふるさと」がどこにあ  
るのかを尋ねる永遠に尽きるこ  
とのない長い旅に出たのである。

(医局秘書)